

ネットワーク情報学部

准教授 安藤 映

理科系の課題は微分積分のような計算であって、文章を書くことではない。そう思っている人はいないだろうか。それは実は正しくない。実際には計算をすることは仕事の一部でしかなく、多くの場合はその結果をもとに人を説得する文章を書くことが重要になる。そして、文科系の人にもその機会が訪れることがある。

企業で働いているとして、今後の方針を決めるためにデータを取りまとめる仕事を考えよう。この時、数字をいくつかピックアップしてグラフを作成しただけでは人を説得するには不十分である。特にデータや図には人によって様々な見方が発生するので、自分が何に注目して何を読み取ったか、文章で自分の見方を示さなければならない。

他の場面でも、仕事の文書で情報を順序立てて伝えるには、順序だった論理的な文章が必要である。

その時、どんな文章を書くべきか。『理科系の作文技術』はその方針を示す一冊である。この際、高校までに習った「起承転結」などとは全く異なる方針になる。本書で示されているのは、事実を伝えることに集中する文章のスタイルであり、「心をゆさぶる」とか「感動させる」といった情緒をできる限り取り除いた書き方である。

これからの大学生活でレポートなどを作成するにあたって、様々な文章を書く必要がある。本書の原則すべてを守ることは難しくても、仕事の文書のあるべき姿を意識しながら課題に取り組むと、より有意義な学びが得られるに違いない。



木下是雄(2002)「理科系の作文技術」中公新書

本館: X/081/C64/624 701578189
神田分館: X/081/C64/624 701663023



読書のスルメ2020

